



7月は河川愛護月間です



川系男子の『川と人』めぐり No. 15～那珂川～

『川と人』めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしょうがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。

坂本貴啓（筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ）

♪ささの葉さらさら のきばにゆれる
お星さまきらきら きんぎん砂子

（唱歌『たなばたさま』 作詞：権藤はなよ，補作詞：林柳波，作曲：下総皖一）

表1 那珂川のフィールドトリップの主な行程

9:20	大学発
11:30-12:45	昼食(道の駅馬頭)
13:20-13:39	余笹川 黒川合流地点
13:43-14:10	大水車小屋(道の駅東山道伊王野)
15:30-15:48	鎌倉山登山
16:04-16:35	那珂川川遊び
16:53-17:05	石畑の棚田(棚田百選)
17:20-17:30	御前山ダム着
19:00	大学着



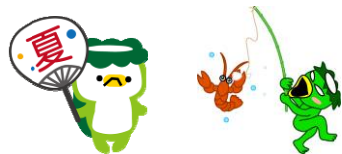
図1 余笹川合流点の堤防上に建つ碑文

1. みんなで那珂川に行こう！

6月1日に筑後川を周って以来、川を周ってなく、川系男子にとっては深刻な川不足だった6月。それを一気に解消する川めぐりが実施された。2013年6月29日に研究室のフィールドトリップで那珂川へ。今学期3度目のフィールドトリップ。なんと今学期のゼミ参加者13人（先生含む）全員がそろう。いつも誰か欠員が出るのが世の常ではあるが、全員がそろった川めぐりは近年稀に見る快挙かもしれない。

那珂川は栃木県的那須岳を源とし、栃木県、茨城県を流れ、太平洋に注ぐ。流域面積約3,750 km²、幹線流路延長約150 kmであり、ともに関東地方第3位の河川である。関東地方の川と言えば利根川や荒川、多摩川などの大河川が人々の賑わいを感じる「動」の性格を持った川だとするならば、那珂川は大河川でありながらも鳥や魚の吐息すら感じ取れる「静」の性格を持った川だと思える。

静かに流れる夏景色の那珂川を表1のような行程で那珂川を巡った。



2. 碑文が語る余笹川

大学から出発して2時間以上かけて那珂川上流域へ。途中昼食をとり、さらに上流へ。那珂川町を流れる那珂川の支流の三蔵川と余笹川の合流点へ到着。

合流点には記念碑が建てられていて、その碑文には平成10年に被災した現場であることが記されている。白横線はここまで水位があがったことを鮮明に刻んでいる（図1）。

平成10年8月26日から31日にかけて那須町で1,254mmの雨が降った。日本の年平均雨量は1,750mmであるが、5日間で1年の3分の2以上の雨が降ったと解釈すれば川が暴れだすのは必至である。看板に刻まれていた当時の写真をみると、どこが河道でどこが堤内地かもよく分からない。この時の被害は死者5名、行方不明者2名、住家被害2,977棟である。

今回訪れた際には清らかなせせらぎのある川の表情で、美しい川の表情しか我々は知らないが、ここに建ち続ける碑文は過去の恐ろしい表情を「決して忘れてはならぬ」と後世に警鈴を鳴らし続けてくれるだろう。



図2 アユノポリ



図4 整備された三蔵川のサケ産卵床



図3 大水車小屋



図5 境橋から上流を望んだ那珂川

3. 大水車小屋とサケの産卵床

余笹川と三蔵川の合流地点から三蔵川をさらに上流へ遡って行くと道の駅「東山道 伊王野」に到着。道の上を見上げるとコイノポリ、いやアユノポリが泳いでいる（図2）。道の駅の端に大きな小屋があるので傾斜を駆け下りて近づいてみる。見上げるほどの大きな水車がギルギルと音を立てながら回っている（図3）。大水車が直径12m、小水車5.6m。（こんな大きな水車を見たのは高梁川水系の小田川の「親子孫水車」を含め2回目だ。）この水車の動力を用いてそばを製粉し、製粉した粉からそば生地をつくりおいしいそばが味わえる。水車を回す動力の水はすぐ脇を流れる三蔵川から引かれている。

三蔵川のこの付近は余笹川水害の翌年にも大きな被害を出している場所でこのあたりも工事ににより水辺が整備された。この復旧工事の最中にサケが数匹三蔵川へ遡上してきたのが確認されたことをきっかけにサケの産卵床を整備しつつ災害復旧工事が行われた（図4）。石のサイズもこぶし程度でサケが河床を自力で掘ることができそう。水はくるぶし上あたりでさらさらと流れており、思わず川に足をつけたくなる。先生はいつの間にかウォーターシューズに履き替えていて川遊びを楽しんでいる。ウォーターシューズを持ってこな

かったことを悔やみ我慢していたが、川遊びの誘惑には勝てず、すばやく靴を脱ぎ棄て、裸足で川の中に。水の冷たさも程よい温度で、心地よい。普段は裸足で川遊びをすることはめったにないが、上流域の透き通ったゴミひとつない川だからこそガラスなどの心配をせず、川を信用して平気で川底を歩き回る事ができた。今年最初の川遊びは三蔵川となった。これを皮切りに今年はいくつの川に入って遊ぶことができるか楽しみだ。

4. 川めぐりは山登り

伊王野を今回の川めぐりの最上流地点として、川を下り、那珂川へ。橋を渡っていると、川のあちらこちらにアユ釣りの人々が立ちつくしている。特に堺橋から上流を望んだ写真は壮大だ（図5）。「静」と「清」を合わせ持った那珂川の空間の中に人が溶け込んで恵みを楽しんでいる。

那珂川の美しい流れを横に那珂川を下る。少し山間に入りこんだところで下車。茂木町の鎌倉山登山道の入口に到着。登山道付近には小川が流れていたのだからこれを見るために先生は立ち寄ったのだらうと思っていて、涼やかな気持ちで小川を眺めていたら、見事に期待を裏切られた。小川をちょろりとだけ見た先生は小



図6 山の上で川を背景に集合写真

川に架かる橋を渡りどんどん山の中へ。身構える間もなく登山が始まった。先生を先頭に13人が一列に並び山道につくる行列はどこか滑稽で、思わず笑っていると「先輩、そんなに可笑しいですか？」と後輩に呆れられる。鎌倉山は216mと低山ではあるが、傾斜は急で、それなりの体力を要する。ふと後ろを振り返ると先ほどまで一定間隔を保っていた行列も乱れ始めていた。自身も笑う余裕がだんだん無くなってきたところを見ると意外と応えるミニ登山だ。車中でスポーツマンの後輩が「オレはきついトレーニングをする時は自分にとって良い未来を想像して乗り切るんです。そうすればどんなきつい練習も乗り越えられますよ。」と話していた言葉がふと頭に浮かぶ。ふーんと他人事のように聞いていた後輩の格言がまさか10分後に自身の頭の中にこだまする状況になるとは思いもしなかった。「このキツイ山道を登ればきっと開けた絶景が見える」と自分に言い聞かせながら足を前に運んだ。

登り始めて10分。山頂付近の展望箇所に到着。山際を取り巻くように蛇行しながら流れる那珂川と広大な耕地が広がっていた。川沿いを走っている時にはよく分からなかった河道の蛇行もここから見ると狭窄部で流れを反転させ、流れているのもよく分かる。13人全員意志と根性が強く、一人も休むことなくあっという間に全員が山の上にそろった(図6)。

川めぐりはただ川に近づけばいいわけではない。「木を見て森を見ず」ならぬ、「水を見て川を見ず」。先生と川めぐりに行くと、いつもそこに山があれば唐突に山登りが始まるが、きっと先生は自らの五感で川めぐりの真髄を感じ取ってほしかったに違いない。(考え過ぎですか？先生・・・)

5. 川に入れば誰でも川系男子・川ガール

ミニ登山を終え、下山。車でちょっと移動し、鎌倉山付近の那珂川の河原へ。さっきまで登っていた鎌倉山を今度は川から見上げる。川岸には川船がぽつんと置いてあり、ここでも那珂川の「静」を感じ取れる。手を繋いだカップルが水際の礫河原を歩いているのを見ると川デートもいいものだなあとちょっとうらやましくも思えた。



図7 母と娘の川遊び



図8 石に付着した川ゴケ

また、川の浅瀬をお母さんに手を引かれて女の子がよちよちと水の中を歩いている(図7)。川デビューだろうか？ちょっと微笑ましい。

水際の護岸に腰を下ろしながらぼーっと川の流れを見ていたら上流で短パン、半ズボンの少年、いや先生が、いつの間にか着替えて川に腰をおろし気持ちよさそうに浸かっている。先生が川遊びをしているのを護岸から遠巻きに眺めていたゼミ生もうらやましく思ったのか、一人、また一人とズボンの裾をたくし上げ、ゆっくりと川の中に入っていく。美しい川を目の前にすると、頭の中では濡れると分かっているもみんな川の魅力には勝てない。ヒンヤリとした川の中に長い時間立ち尽くす。川の中に入って遊んでいると誰もが川ガール、川系男子になる。ただ、川の中の石に川ゴケがびっしりと生えている(図8)のを見て、「あ！すごい！こんなところにもバイオマスが生産されてるっっ！」と発言するあたりは川の研究室ならではのところだろうか。川ゴケの生育がいいのは那珂川のバイオマス量が多いことも推察できる。草食性のアユには育ちがよいほど棲みやすいのだろう。



図9 石畑の棚田（棚田百選）



図10 御前山ダム

6. 潤う土地

6-1. 石畑の棚田

川遊びを終え、那珂川の本川を離れる。田園地帯を通る。山道を通りすぎると段々に田んぼが形成されている。棚田百選の一つの石畑の棚田である。関東地方には3つしかない百選のうちの一つである。段々の一つ一つに水が張られていて、稲も青々と生長している。山に囲まれた地で青々した田んぼが見せる風景は夏らしい（図9）。

川から用水路で直接水を引くことができない棚田は山からの水を集めてくる必要があったり、大型の機械で田植えや稲刈りができなかったりと大変手がかかる。それでも棚田が続いてきたのは米を少しでも多く育てたいという当時の人の執念と、この美しい風景を残していきたいと思う現代の人の気持ちからだろう。

6-2. 御前山ダム

棚田を離れ少し行くと御前山ダムに到着（図10）。このダムは農林水産省の所管するダムで、2011年に完成した新しいダムである（ロックフィル、堤高52m、堤頂長298m、総貯水量7,200,000m³）。農業用専用ダムはため池のような小さなアースダムは多いがこの規模の農業用専用ダムは珍しい。

5,544ha（55.4km²）を灌漑する。那珂川流域の耕地面積全体約710km²からすると約12分の1と大きな役割を担っている。もっとダムを良く見学したかったが、ダム堤体は見学できないようにフェンスが張られていて非常に残念だった。

夕暮れのダム湖を眺めてこの日のフィールドトリップは終了し、大学への帰路についた。那珂川が大好きになるのに十分な川めぐりであった。

7月は河川愛護月間。川に出かけましょう！



（河川愛護月間推進標語 松永 卓眞，写真 筆者撮影『川の魅力』）

【筆者について】

坂本 貴啓（さかもと たかあき）

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC（青少年博物学会）、大学時代ではJOC（Joint of College）を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りには川に入って遊ぶこと。